

Q9

水産物はきちんと管理されているの？



A



国は、関係自治体および関係業界団体等と連携し、主要な水産物の定期的なモニタリング調査を行ってきました。福島県沖では沿岸漁業は試験操業とされ、漁協の行う調査では国の基準の2分の1 (50Bq/kg)を超えた場合は出荷を自粛する措置が取られてきました。震災から10年を経て、モニタリング調査で基準値を超える結果が極めて限定的になったことから、2021年4月以降、本格操業へ向けた取り組みが始まりました。

検査の枠組み



出典：水産庁「知ってほしい放射性物質検査の話」
<https://www.jfa.maff.go.jp/j/koho/saigai/attach/pdf/index-1.pdf>

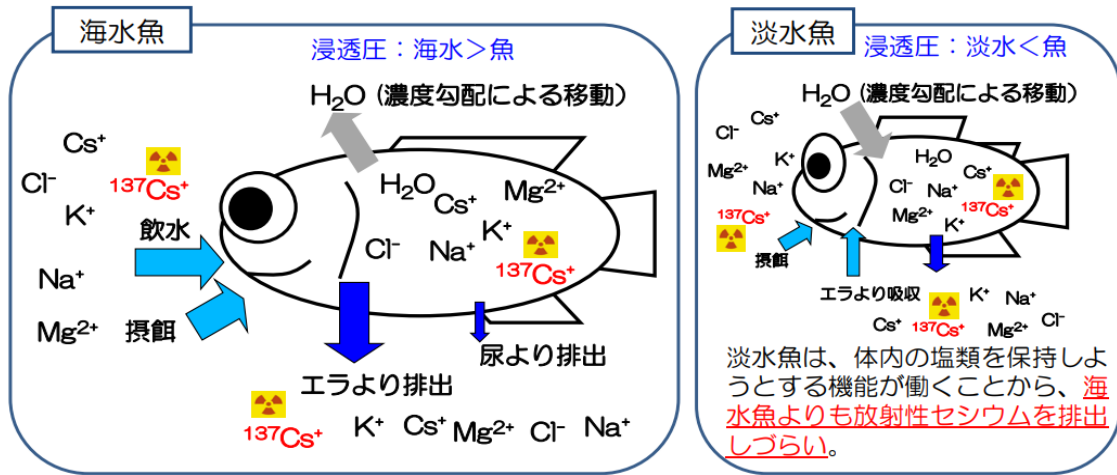
試験操業から本格操業へ

福島県沖では、水産物の放射性物質検査の結果を踏まえながら、出荷制限されていない魚種のうち、放射性物質の値が低い、安全が確認された魚介類のみを対象として、2012年6月から、小規模な操業と販売を行う試験操業・販売を行ってきました。福島県の漁業関係者、水産加工・流通関係者、学識経験者、金融機関、行政機関などが漁業の再開を目指して「福島県地域漁業復興協議会」を設立し、慎重に取り組みを進めてきました。

2017年3月からは福島第一原子力発電所の半径10km圏内を除く海域が対象となりました。

対象種は開始当初の3種から、2017年3月末には97種まで拡大し、同年4月からはすべての魚介類（出荷制限されている魚介類を除く）を対象としました。そして、海産物の安全性が十分に確保されたこと、出荷先の市場において一定の評価が得られたことなどから、2021年4月から本格操業に向けた取り組みを進めています。

水産物の種類による放射性物質の影響の違い



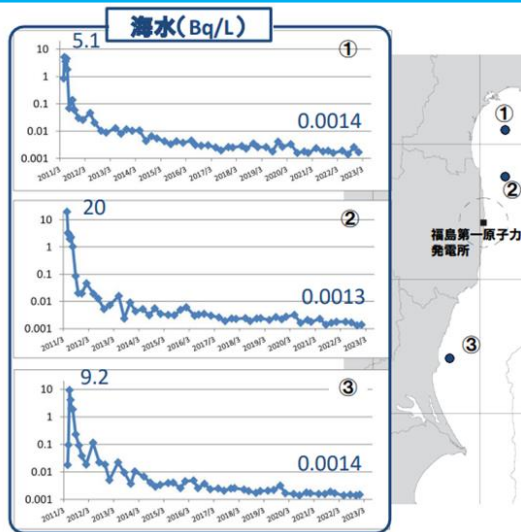
出典：消費者庁「食品と放射能 Q&A」

- 海水魚は、取り込んだミネラルを速やかに排出しようとする機能が働くため、放射性セシウムは他のミネラルとともに体外に排出されます。放射性セシウムの存在しない環境では魚体内から50日で半分程度が排出されるとされており、海水中の放射性セシウムの濃度が低下すれば徐々に体内の放射性セシウム濃度も低下します。
- タコや貝などの無脊椎動物は、塩類が海水と体の中を自由に行き来している状態なので、海水中の放射性セシウム濃度が低下すれば体内の放射性セシウム濃度も低下します。
- 成長段階などによって海を広く移動するサケ類、サンマ等の**回遊魚**については、これまで基準値を超えるものは見つかりません。
- ヒラメやカレイなどの海底近くに生息する魚は、海底の泥から平常時よりも高い濃度の放射性セシウムが検出されても必ずしもその水域で生息している魚類等の放射性セシウム濃度が高くなるとは限りません。セシウムが底泥中の粘土に強く吸着されているためです。

ポイント

海水魚は、体内の塩類を排出しようとする機能が働くため、淡水魚に比べて放射性セシウムを排出しやすい。

海水の放射性セシウム濃度の推移(地図上の3か所)



出典：消費者庁他「食品中の放射性物質の最近の検出状況令和5年7月」

海産種の調査結果

2024年3月5日現在



出典：水産庁「水産物の放射性物質調査の結果について」

ポイント

- 福島県及び隣接県沿岸の海水中の放射性セシウム濃度は減少傾向にあります。
- 福島県産の魚介類は、2017年度以降は調査した99%以上が検出限界値未満となっており、2021年度に基準値(100Bq/kg)を超過したのは、海産物ではクロソイの2検体のみです。